



書評

グレゴリー・スミッツ著・渡辺美季翻訳 『琉球王国の自画像－近世沖縄思想史』（ぺりかん社）

屋良 健一郎（東京大学大学院 博士課程）

本書は、東アジア思想史の研究者グレゴリー・スミッツ氏の1999年出版の著書 *Visions of Ryukyu* の日本語版である。琉球史・東洋史研究者である渡辺美季氏の丁寧な翻訳によってこの興味深い研究を手軽に読めるようになったことがとても嬉しい。

「序」では、「国民国家化」以前の近世琉球に、王国のアイデンティティ（琉球像）を構築し、その琉球像のもとへ琉球人を統合しようとした為政者たちがいたことを指摘する。彼らによるアイデンティティ構築の過程と、それが琉球史に与えた影響を追究するのが本書の課題として示されている。

第1章「琉球の地位および日本・中国との関係」では議論の前提として、「日本の一部でありながら別の意味においては日本の外部」であり「中国皇帝に儀礼的・文化的に従属していた」琉球を「準・独立国」と位置付ける。「準・独立国」である琉球と日本との関係の曖昧さゆえに、琉球人自身が日本との関係性を主体的に定義することができた、とする指摘は重要である。そして、琉球人が主体的に描いた琉球像が次章以降で検討される。

第2章「北への眼差しと西への眼差し」では、薩摩の支配を受け容れた上で日本文化の習得を推進した向象賢と、それとは正反対に、琉球を中国の臣下とみなし中国文化（特に漢学）を普及させた程順則の思想が紹介される。

そして、向象賢の政治改革、程順則の漢学推進の影響を受けつつ独自の琉球像を構想した蔡温が第3章「琉球の自律性」、第4章「琉球の再興」で考察される。蔡温は、琉球の運命を決定するのは琉球人であり、儒教社会を実現することで琉球の繁栄がもたらされると考えていたという。その信念に基づき、儒教を政治に反映させ、儒教道徳とは相容れない伝統的な祭事や信仰を禁止・制限した。ここで注目すべきは、これらの禁制がうまくいっていなかったことを示す史料から、農民達が蔡温の目指す琉球像とは別の世界観をもっていたと指摘している点である。また、平敷屋朝敏の文学作品に見られる個人の欲望の充足といった特徴を、平敷屋の琉球像と捉え、自己修養に基づく階層社会を目指した蔡温の琉球像への抵抗

と見る点も興味深い。

第5章「蔡温の琉球像への対抗」と「エピローグ／結論」では蔡温が示した琉球像が彼の死後にどのように継承され、やがて崩壊していったのかを記述する。現代までを対象とする巨視的な視野に感銘を受けた。

本書の特徴の一つは、琉球史の展開を為政者の琉球像と他の人々の琉球像の対立と捉える視点だ。結果的には、琉球人自身が運命を決定する儒教社会という蔡温が描いた琉球像が王国の政治に最も影響を与えたわけであるが、その過程で生まれた抵抗、すなわち主流にはなれなかった他の琉球像にも言及し、排除された人々や農民の息吹をも感じさせるダイナミックな琉球史が提示された。

一つだけ気になったことを挙げると、琉球の儒教化が進む18世紀前半に、一方で王府が日本文化を積極的に受容していたことをどう考えるかという点だ。本書で触れられていない事例ではあるが、康熙52年（1713）に王府は立花や日本の書札礼を得意とする者に、その技能を後継者に伝授するようという命令を立て続けに出している（『那覇市史資料編』第1巻7、17・555・616頁）。また、「浮縄雅文集」（沖縄県立図書館所蔵）には、1741年に国王尚敬が芸能に堪能な者を集め、立花や茶道などを披露させたことが記されている。向象賢の政策も思い出されるが、儒教社会が目指される一方で王府の意向で日本文化習得の動きがあったことは、親中か親日かといった視点では必ずしも割り切れない琉球の複雑さを感じさせる。こういった動きを含めた上で蔡温の琉球像や近世琉球史がどう評価されるのか、気になるところだ。

最後となったが、本書刊行にあたって新たに記された「日本語版への序文」は著者の現時点での研究の到達点を知ることができる。注目すべきは、蔡温の献策と同様のものが、蔡温以前に中国で議論されていたという指摘であろう。東アジアと琉球王国の政治・思想面でのつながりを示すこの興味深い指摘に、著者の今後の研究への期待も高まるばかりである。

